第十回ハイスクール劇王　高校生短編演劇競技大会　応募作品

追想の住処

作：松田　澪

ラナ　高校三年生
スミレ　高校三年生
シオン　高校三年生

音楽。
緞帳開く。

二月末日。卒業式前日。放課後。
教室。閉めているはずの窓の隙間からは、冷たい風が流れてくる。
教室の中で、机に集まって楽しそうに談笑するラナとシオン。
二人の目の前の机にはペンが散らばっていて、傍らには二人の鞄が無造作に置かれている。
隣の机の端には本が一冊置かれている。シオン、スマホを取り出し、ＳＮＳを流し見している。

シオン　あー、疲れたあ
ラナ　疲れたねー
シオン　ずっと立ちっぱなしきつくない？
ラナ　それなー
シオン　予行でも立つ必要ある？
ラナ　それが予行だし
シオン　確かに
ラナ　…学校来るのも明日で最後だねー…
シオン　ちょっと寂しいかもーー

シオンのスマホからビーリアルの通知音が鳴る。
ラナもスマホを取り出す。

シオン　あ

ラナ　ビーリアルタイミング良！撮ろ〜〜
シオン　先に私のスマホねーー！
ラナ　おっけー

二人、スマホに向かってポーズをする。
シャッター音。

シオン　いえーい！
ラナ　撮れた？
シオン　撮れた撮れた！

ラナ、シオンのスマホをのぞき込む。

ラナ　待って待って、私盛れてなくない？
シオン　そうかなー？
ラナ　ちょっと、もう一回ね！
シオン　はーい。ピース！

シャッター音。

ラナ　おっ！今度は盛れた〜
シオン　きゃーー！
ラナ　わあっ、シオンうるさいなあ、何？

シオン　今度は私が盛れてないぃぃ
ラナ　えーー、もう。今度こそ！いくよ？
シオン　はい！

二人、渾身のギャルポーズ。
シャッター音。
分かりやすく落ち込む。

二人　いや、盛れねーーーー！
シオン　えぇー？こんなに盛れないことある？
ラナ　まあ所詮無加工だし…
シオン　やっぱり加工しか勝たん
ラナ　とか言ってたら二分過ぎちゃったしーー…
シオン　あぁ〜〜
ラナ　まあ、そんな日もあるよね
シオン　ふん！ビーリアルのバカ！
ラナ　バカって
シオン　アホ！
ラナ　辛辣だ
シオン　カスーーー！
ラナ　いやカスやめて

二人、はあ、とため息を吐く。

暫くして顔を見合わせ笑いあう。

シオン　やっぱりラナと居るの楽しいわ
ラナ　え、今？
シオン　なんとなく？
ラナ　やめてよー、泣けてくるじゃん
シオン　早くない!?
ラナ　ってのは冗談
シオン　も～～
ラナ　あー、でももう卒業かあ
シオン　あっという間だね
ラナ　入学して、いつの間にか夏休み
シオン　文化祭して、体育祭して
ラナ　三学期になって、期末テスト終わったら二年生
シオン　で、また夏休み来て…充実したJKライフだったなあーー
ラナ　いや本当にね
シオン　私たちが一番満喫してたよね
ラナ　満喫しまくりよ
シオン　ラナと仲良くなったのは二年からだっけ
ラナ　そうそう
シオン　でも、二年の最初のほう来てなかったよね
ラナ　あ～～、うん。風邪ひいちゃってて、さあ
シオン　新学期早々災難だよね

ラナ　でも新学期デビューできたからよし！
シオン　確かに。取り残されるどころか、ちょっと人気者になってたし
ラナ　なんかよく分かんないよね～
シオン　なんでそんな感じになったんだっけ
ラナ　あーー…えー、忘れちゃった
シオン　ええ、忘れたの
ラナ　だって二年も前の事だし
シオン　一年のときはラナの印象なかったのに、二年になって急にって感じだよね
ラナ　それは違うクラスだったからでしょー？
シオン　あーー三年も同じクラスになりたかったなあ
ラナ　それなー、そうしたら今年ももっと満喫できたのに
シオン　まあなんだかんだ楽しかったけどー

シオン、机にぶつかり本が落ちる。落ちた本を拾うシオン。

シオン　何これ、本？
ラナ　なんてやつ？
シオン　ええと。…ななめ…よう？
ラナ　な、ななめ？

シオン、ラナに表紙を見せる。

ラナ　あぁ、なんだ。斜陽じゃん

シオン　斜陽？
ラナ　うん、斜陽。知らない？
シオン　しらなーい
ラナ　えぇ、太宰治だよ？
シオン　走れメロス、とか？
ラナ　そうそう
シオン　メロスは激怒した！
ラナ　お、大正解
シオン　あと、人間失格？
ラナ　それも有名だね
シオン　他は何かあったっけ、思い出せないや
ラナ　嘘でしょ
シオン　小説とかよくわかんないし
ラナ　まぁ、難しいよね
シオン　ラナは詳しいよね。さすが、文学部受験しただけあるわ
ラナ　でしょー。文豪はちょっと詳しいのよ
シオン　ははー、さすがラナ様！
ラナ　ちょっと、やめてよー

シオン、ラナをからかいつつ本をペラペラめくる。

シオン　わあ…、何が何だか分かんないや
ラナ　最初から読まなきゃ分かんないでしょ

シオン　そりゃそうか。でも難しいの読めなーい
ラナ　えー面白いよ？
シオン　ふーん

シオン、栞が挟んである場所で手を止めて。

シオン　…死ね！

突然の暴言に驚くラナ。
シオン、気にせず続ける。

シオン　という言葉を与えるのさえ、もったいない。戦争。日本の戦争は、ヤケクソだ。ヤケクソに巻き込まれて死ぬのは、いや。いっそ、ひとりで死にたいわい。人間は、嘘をつくときには、必ず、まじめな顔をしているものである。この頃の、指導者たちの、あの、まじめさ。ぷ！

暫く本を眺め、本を置く、シオン。

シオン　やっぱ難しーー
ラナ　びっくりした、急に死ねとか言わないでよ
シオン　だって書いてあるんだもん
ラナ　にしても急過ぎだわ
シオン　ごめんってー
ラナ　ってか、それ人の本でしょ？勝手に見ていいの？

シオン　あぁ、いいのいいの。東さんのだもん
ラナ　東さん…って、東スミレ？
シオン　あ、そうそう
ラナ　シオンと同じクラスだったんだ
シオン　まあ全然話したことないけどねー
ラナ　そうなんだ
シオン　だってノリ悪くない？ああいう陰キャ
ラナ　確かに
シオン　なんか陰キャ特有のノリとかあるけど全然理解できない。何が面白いん
ラナ　さあ？本人たちは面白いんでしょ
シオン　それで友達〜〜とかしてるけど、絶対友情とか分かんないよね
ラナ　それはそう
シオン　こっちが話しかけたところで「あ…あっ、うん」くらいしか言わんじゃん
ラナ　カオナシかよって
シオン　わかる、あの日本語不自由な感じ
ラナ　コミュニケーション能力ないよね
シオン　まあ所詮陰キャに人権無いし。あ、カオナシならそもそも人ですらないかー
ラナ　人外？あと協調性もないし
シオン　うわ！わかる。自分中心みたいなね!?
ラナ　自分が仲間外れにされるのは陽キャの人たちが構ってくれないからです！
シオン　それ言われたことある！マジしらねー、仲良くなりたいなら自分から来たらいいのに
ラナ　それな！

シオンのスマホから彼氏専用着信音。

シオン　あ、彼ぴっぴからだ〜〜

ラナ　ラブラブじゃん

シオン　ちょっと出てくるね

ラナ　はあい

シオン　あ！彼ぴっぴ〜〜！え？名前で呼んで？もう！しょうがないなあ〜〜ア・ユ・ト♡

ラナ　うわ、典型的なバカップルだ

シオン　も〜〜自分で言ってて照れないでよっ

シオン下手にはけようとする。
同時にスミレ、下手からやってくる。

スミレ　わっ、

シオン、スミレ、衝突。
無言で走り去るシオン。

スミレ　はっ、すみませ…ん…

シオン、下手にはける。
スミレ、暫くして顔を上げる。

スミレ　いった…うざ、死ねよ。…ぇ、ラナ？どうして…
ラナ　スミレ…？

二人気まずそうに。

ラナ　あーー、久しぶり？
スミレ　うん。久しぶり
ラナ　…どうしたの？
スミレ　忘れ物、して
ラナ　忘れ物？
スミレ　あ、ええと。本
ラナ　本ね。本ならここにあるよ

ラナ、席から立たず、指で指示。

スミレ　ありがと
ラナ　いいえー

スミレ、本を取り、帰ろうとする。

ラナ　あー…じゃあ、…またね？

スミレ、立ち止まり、振り返る。

スミレ　あ…、えっと、ラナ
ラナ　何？
スミレ　…

鞄を漁り、手紙を取り出すスミレ。

ラナ　…スミレ？

スミレ、驚き咄嗟に手紙をしまう。

スミレ　う、ううん！なんでもない。…じゃあ

スミレ、再度帰ろうとする。

ラナ　あ、ちょ…っと、待って。
スミレ　…何？
ラナ　あ、えと…
スミレ　…？
ラナ　…あーー、その、
スミレ　うん
ラナ　えっと…スミレ、さ…、あの時のこと、

二人、気まずそうに

ラナ　…

シオン、下手から戻ってくる。

シオン　ただいま〜

ラナ、とっさに口をつぐむ。スミレ、驚いて動けずにいる。
シオン、スマホを触りつつラナの傍に近づく。

ラナ　シオン…！お、かえり。早かったね
シオン　なんか明日の予定聞かれただけだった
ラナ　ふーん。明日は卒業式終わってデート？
シオン　その予定〜〜

シオン、スミレに気付く。

シオン　あれ、あれあれあれ〜？東さんじゃないですか〜。誰かと思ったじゃん
スミレ　…
シオン　お返事なしですかー？
スミレ　…あ、えと
シオン　なんてー？

スミレ　あっ、あ…
シオン　カオナシ発動中？
ラナ　こーら
シオン　えー放課後居るの珍しいね～
スミレ　忘れ物、したので
シオン　あぁ、本？
スミレ　そう
シオン　わざわざ？
スミレ　大事な物なので
シオン　ふーん

シオン、スミレから本を取る。

スミレ　あ、ちょ…！
シオン　毎日毎日、よくこんなの読めるよねー
スミレ　返して
シオン　どうしよっかな～…あ～～！思い出した
スミレ　なんですか…？
シオン　東さんって二年の時いじめられてなかったっけ
スミレ　…まあ。
シオン　丁度ラナが復帰した辺り？だよね？ラナさん
ラナ　あ、うん。そうそう！
シオン　東さんこんなだし、いじめられてもしょうがないよね～

ラナ　確かに
シオン　それこそ?きっかけって東さんがラナの本盗んだからでしょー?
　陰キャはやることも陰湿なのねえ
スミレ　ええと
シオン　何?言い訳?
スミレ　ちがくて
シオン　じゃあなによ
スミレ　…仕方ないじゃない
シオン　は?
ラナ　…スミレ?
スミレ　…
シオン　だったらやり返されても当然じゃん
ラナ　…ほんと。盗みとか最低
スミレ　…ごめんなさい
シオン　ごめんで済むわけないでしょ。友達裏切るとか、やっぱり陰キャって友情分かんないんだ
スミレ　…そんなこと、
シオン　うるさいなー、やったことに責任持ちなよ
ラナ　…だからかな!新学期早々人気者になってたのって!
シオン　え、絶対そうだわ
ラナ　おかげで楽しい高校生活送れたわ
シオン　東さんに感謝じゃん
ラナ　あはは、ありがとう〜
シオン　うわ、わざとらしい

スミレ　…あの、帰っていいですか
シオン　えー帰っちゃうんだ
スミレ　いる意味ないので…
シオン　ノリ悪ーい
ラナ　きっとスミレちゃんも忙しいのよ！
シオン　あはは、ラナが暴走してる。やめてあげなよ～

スミレ、暫くラナを見詰めつつ肩を落とし静かに下手にはける。

シオン　…ってあれ
ラナ　あ…
シオン　帰ってっちゃった
ラナ　…気まずくなっちゃったんじゃない？
シオン　でも自業自得じゃん、は言い過ぎか～～
ラナ　まあねー…
シオン　あ、本返すの忘れてた
ラナ　返す気あったんだ？
シオン　ちょーっとからかって返そうかなーって？

シオン、本を机に置き、スマホを出し再びＳＮＳを流し見している。
ラナ、暫く本を見つめ、手に取り、ゆっくり席を立つ。

ラナ　なんか、久しぶりに触った気がする

シオン　何をー？
ラナ　本
シオン　教科書は？
ラナ　それは本のうちに入りませーん
シオン　うわ、うちの担任みたいなこと言わないでよ
ラナ　教科書は教科書だもん
シオン　うざーい
ラナ　事実ですー

ラナ、本を少しずつめくる。

シオン　久しぶりってことは昔は読んでたの？
ラナ　たしなむ程度にねー
シオン　やっぱさすがだわ
ラナ　まあ、好きだったんだよね
シオン　じゃなきゃ文学部なんか受けないか
ラナ　多分？

栞が挟んであるページを開く。

ラナ　人から尊敬されようと思わぬ人たちと遊びたい。
　けれども、そんないい人たちは、僕と遊んでくれやしない。
シオン　それは、どこのセリフ？

ラナ　シオンが読んだところの続き
シオン　死ね！
ラナ　だから急に死ねはやめてってば
シオン　ラナも東さんいじめてた時、散々死ね死ね言ってたでしょー
ラナ　…そう、だけど

シオンのスマホから着信音。

シオン　うわ。びっくりした、何？また彼ぴっぴだ…

シオン、気まずそうに電話に出て、下手にはける。

シオン　ラナ、ごめんすぐ戻る！
ラナ　…はあい
シオン　もーーなぁに？うんうん…

暫く静寂が続く。照明、夕方。
ラナ、本を隣の机に置く。

ラナ　結局、聞けなかったなーー…

ぼうっと天井を眺めるラナ。
スミレ、下手からやってくる。それに気づき驚くラナ。

ラナ　スミレ…!?
スミレ　あ…ラナ
ラナ　ど、どうしたの
スミレ　あー…、ええと
ラナ　うん？
スミレ　ていうか、シオンちゃんは
ラナ　シオンなら、彼ぴっぴと電話してる
スミレ　彼ぴっぴ…？
ラナ　彼氏、の事
スミレ　あぁ
ラナ　スミレ、よく戻ってきたね、シオン居たら…
スミレ　…？
ラナ　いや、そんなことはどうでもよくて。…なんで戻ってきたの？…あー、もしかして、本？
スミレ　あ、うん。シオンちゃんに取られたままだったな、って
ラナ　えぇ、わざわざ？
スミレ　…うん

スミレ、本を手に取り。

ラナ　ほんと、本好きだよね
スミレ　うん
ラナ　小説なんて真面目に読んでる高校生中々いなくない？

スミレ　好きなんだもん
ラナ　…知ってる
スミレ　私たちが仲良くなったの、それがきっかけだし
ラナ　…うん
スミレ　ラナ、一年の時覚えてる？
ラナ　まあ…なんとなく？
スミレ　奇跡だったよね、中学の友達居るって
ラナ　わかる。独りじゃないし
スミレ　心強かったなあ
ラナ　絶対楽しいって思ったもん。…でも二年は

ラナ、口を閉じ苦しそうに俯く。

スミレ　…クラス、離れたくらいで休まないでよ
ラナ　…ごめん。スミレなしでやってけるか不安になっちゃって
スミレ　私だって、離れて不安だったんだから
ラナ　っ、そうだよね、ごめん…ごめん弱くて…！
スミレ　…いいよ、終わったことだし。ラナは悪くないから

ラナ、気まずそうに。

ラナ　っ、あの、さ
スミレ　うん？

ラナ　…怒ってないの
スミレ　…

スミレ、少し考えて。

スミレ　…怒って、ないよ
ラナ　そ、か
スミレ　怒るわけないじゃん
ラナ　なんで
スミレ　ラナには、私が計画したことに協力してもらっただけだもん
ラナ　そうだけど…他にやり方…なかったのかな
スミレ　…どうだろう
ラナ　陰キャでいる事は馬鹿にされて辛かったし、陽キャになりたいとは思ってたけど、違うやり方ってあったんじゃないかな
スミレ　…当時の私はこれが正解だと思ったんだ
ラナ　でも、スミレが独りになってまでする必要は…！
スミレ　それしか思い浮かばなかったんだもん
ラナ　…スミレはそれで良かったの？
スミレ　…仕方なかったんじゃないかな
ラナ　仕方なかった…って。私がスミレを裏切ったことに変わりはないじゃん
スミレ　ラナは自分が私を裏切った、みたいに言うけど、周りからすれば私がラナを裏切ったんだから
ラナ　…そりゃ、傍から見たらそうかもしれないけど
スミレ　…ラナは本を盗られた事にして、私が実際に盗んだだけ。

わざと見られるようにしたんだから、いじめられて当然じゃない？
ラナ　自分を犠牲にしてまで私を助ける必要は
スミレ　状況を変えるには、多少の犠牲も必要だから
ラナ　そんなの、戦争みたいなものじゃない
スミレ　…あー、戦争、というより革命、かな？
ラナ　革命？
スミレ　そう、革命
ラナ　…革命なんて、聞こえがいいだけで戦争と同じよ
スミレ　…そんなの、今更だよ

ラナ、スミレを見つめる。

スミレ　…私ね、間違いだなんて思ってないよ
ラナ　…え？
スミレ　独りでも大丈夫って思えたから
ラナ　…そ、か
スミレ　私の居場所はちゃんとある、って
ラナ　居場所…
スミレ　間違いなら、もっと早く気付けたはずだし。…そもそもしてないでしょ
ラナ　でも、私たちは気付けなかったから

スミレ、ラナに背を向け鞄から手紙を取り出し本に挟む。
話を誤魔化すように口を開く。

スミレ　ぁーーー…ラナ
ラナ　…？
スミレ　これ、あげる

スミレ、ラナに本を差し出す。

ラナ　え、なんで
スミレ　…なんでだろう。なんとなく、かな
ラナ　なんとなくって何よ
スミレ　だって最後だし？
ラナ　最後って。まだ明日があるじゃん
スミレ　まあまあ
ラナ　え～…？
スミレ　…じゃあ、今度こそ。帰るね
ラナ　あ、ちょっと
スミレ　グッド・バイ
ラナ　あぁ、

スミレ、下手にはける。
ラナ、スミレの背中を見つめる。

ラナ　グッド・バイ、か

スミレが出ていったのを確認し、本を開く。
ラナ、手紙を読み始める。

ラナ　…ラナへ。無事に卒業できるみたいでよかった。本当に心配してた。
あの時の事がきっかけで、ラナが周りと打ち解けることができてうれしい。死にそうなラナを見てると、
私まで死にそうで、死にたくないから私なりに必死に考えたんだ。離れることも想定してた。
本当はずっと仲良くしたかったけど、私は県外の大学に進学するし、もう会えないと思う。だけど

ラナ、最後の一文を見て少し戸惑い、口を閉じる。
手紙を眺めているラナ。暫くして鼻をすする。

ラナ　スミレ…

シオン、慌てて戻ってくる。ラナ、シオンが戻ってきたことに気付き背筋を伸ばす。

シオン　ごめん！彼ぴっぴが…って、どした？
ラナ　あー…、いや、なんでも
シオン　なんで泣いてるの
ラナ　あれー…？おかしいなあ
シオン　もう、卒業式明日じゃん、泣くの早いって
ラナ　ごめんごめん

ラナ、制服のすそで涙をふく。

シオン　あ、もしかして、私に会えなくなるの、さみしい？
ラナ　…なわけないじゃんーー
シオン　ほんとかなあ〜〜
ラナ　シオンは…いつでも会えるじゃん、地元で就職なんだから
シオン　確かに？
ラナ　だから、嘘じゃないよ
シオン　えー、…ってやば！早く用意まとめないと怒られるっ
ラナ　彼ぴっぴに？
シオン　そう、今日は一緒に帰ろって駄々こねられてさあ
ラナ　え、待ってくれないの。電車来るまであと二十分もあるけど!?
シオン　あー…、ごめんね

悪びれもなく謝るシオン。
ラナ、少し考えて。

音楽、フェードイン。

ラナ　…シオンってさ、独りでも、平気？
シオン　平気、かなあ。全然大丈夫
ラナ　…そっか

シオン　でも、彼ぴっぴとか、友達とか。周りに居たらもっと楽しいから作ってる、だけ！
ラナ　…！
シオン　ラナは？
ラナ　え？
シオン　独りでも、平気？
ラナ　…うーん
シオン　ま！このシオン様が居るから心配しなくてもよし！
ラナ　シオン…！
シオン　…って！さみしいからって引き止めないで！
ラナ　だからさみしくないってば！
シオン　ほんとに？
ラナ　…そんなに怒られるの？
シオン　駄々こねると面倒なんだよねー
ラナ　なんか…子供みたい？
シオン　ほんと子供！わがまま。だけど、好きだから
ラナ　別れない？
シオン　当たり前ーー
ラナ　そりゃそうか
シオン　んじゃ、帰るわ。また明日！
ラナ　はーい、また明日！シオン

シオン、鞄を持ち急いで下手にはけていく。
再び静寂に包まれるラナ。椅子に座り、机に置かれた本を読む。

ラナ　独りでも、大丈夫、か…

高まる音楽。
緞帳閉まる。

引用　角川文庫出版「斜陽」
「死ね！という言葉を与えるのさえ、もったいない。戦争。日本の戦争は、ヤケクソだ。ヤケクソに巻き込まれて死ぬのは、いや。いっそ、ひとりで死にたいわい。人間は、嘘をつくときには、必ず、まじめな顔をしているものである。この頃の、指導者たちの、あの、まじめさ。ぷ！」
「人から尊敬されようと思わぬ人たちと遊びたい。けれども、そんないい人たちは、僕と遊んでくれやしない。」